第52回大会キーノートレクチャー：体育原理

「教師」か、「コーチ」か：
「運動部活動の指導」と「コーチング」の問題点

久保 正秋

Teacher/Coach re-examined: educational problems of coaching

Masaaki Kubo

Key words : athletics, teaching, coaching circuit

(Japan J. Phys. Educ. Hlth. Sport Sci. 47: 485-490, September, 2002)

キーワード：競技スポーツ、ティーチング、コー
チング回路

はじめに

「コーチは教師である」、あるいは「コーチングはティーチングである」と言われる。このような主張を「コーチは教師である」論と名付ける。これら「コーチは教師である」論は、(1) 教育制度上の「教師」としての地位、(2) 競技スポーツの教育的有効性、(3) 「コーチ」と選手との人間関係における教育的機能、をその論拠としている(久保, 1998, p. 52)。しかしながら、「教師という地位」にあり、選手との「親密な人間関係」において「教育的に有効な競技スポーツ」を媒体としたとしても、それが教育になるとは限らない。逆に、「ティーチング」と「コーチング」を同一視することによって、教育的な問題が生起している可能性もある。

本稿ではまず、①「教師」と「コーチ」が兼ねられること(これを「教師/コーチ」と表記する)の問題を取り上げる。次に、②「ティーチング」と「コーチング」の相違を検討する。さらに問題

の分析を深めるための概念装置として、③「コーチング実践」という概念を提示し、④現状の「運動部活動の指導」におけるパラドキシカルな現象を分析する。そして最終的に、⑤「ティーチング」≠「コーチング」という仮説を提示する。

I 「教師/コーチ」の問題点

「多くの体育への参入者は、コーチングを望んで加入してくるのであり、教師としての準備は二の次である」(Templin et al., 1982)と指摘されるように、「コーチになるために教師になる」という現状がある。コーチングが「教師/コーチ」になるための最初の動機であるのならば、教師としての仕事は付け加えられたものとなる。また、二つの役割を兼ねることによる過負荷と葛藤の問題が挙げられる。この「役割過負荷」「役割葛藤」の問題に関する先行研究の結果をChelladurai and Kuga (1996, p. 471)は次のように纏めている。①ティーチングとコーチングの基礎をなす目的と職業的な目標は明らかに異なる。②その相違は、教師とコーチの役割の分化に至る。③この異なった要求と責任は役割過負荷や役割葛藤を導

く、④役割過負荷や役割葛藤は「教師/コーチ」たちのストレスやバーンアウトに帰着する。⑤二重の役割において結果を求められ、どちらかの仕事をなおざりにするようになる。⑥一般的に、ティーチングよりもコーチングの役割に焦点を当てることを選ぶ。このように、「教師/コーチ」であるが故に、本来的な「教師」の役割を果たすことが困難となる、という問題がある。

さらに、「パターナリズムの矛盾」という問題が挙げられる。例えば次のような批判がある。「卓越と教育の名において、そしてヒーローを求める欲求において『競技バカたち (athletic brats)』が残される。彼らは、『温情主義的な競技スポーツの巣 (paternal athletic nest)』の快適な範囲から離れた時には、自分自身を知ることもおぼつかず、自分自身に関心をもつこともできそうにない」(Thomas and Ermler, 1988)。つまり「教師/コーチ」として、「選手/生徒」の競技力向上の為に指導すればするほど、その「選手/生徒」の自主性や自立を阻害することになるという矛盾である。

冒頭でも紹介したように「コーチは教師である」論が存在し、そして「教師」と「コーチ」を兼ねるケースが多く見受けられるのが現状であるが、そこにはさまざまな問題が存在している。果たして「コーチは教師である」のか、そして運動部活動の指導者は「教師か、コーチか」。それを明らかにするために、次にそれぞれの「働きかけ」である「ティーチング」と「コーチング」の相違を検討する。

III 「ティーチング」と「コーチング」の相違

Chelladurai and Kuga (1996, pp. 472-479) は「ティーチング」と「コーチング」の相違に関する先行研究を検討し、「集団特性 (集団の大きさ、成員の均質性、能力レベル、動機づけなど)」と「課題特性 (課題の同一性、明確性、構造など)」の相違を指摘している。しかしながらこれらは、その「働きかけ」が生起する状況の相違であり、その「働きかけ」そのものに本質的な相違が存在

する可能性が残る。そこで、ここでは「ティーチング」と「コーチング」という「働きかけ」を「行動」—「行為」のレベルで分析することを試みる。

例えば「AがBにバスケットボールのシュートを『ティーチング』、あるいは『コーチング』している」という二つの「働きかけ」を考えてみよう。この二つは、直接観察可能な「行動 (behavior)」のレベルでは同一のものとして観察される。このレベルではその「働きかけ」の相違を認めることはできない。では、そこにその「働きかけの」意図、目標 (シュートが入るようになる) を代入してみよう。しかし、AのBに対する「バスケットボールのシュート」の「ティーチング」も「コーチング」も共に「シュートが入るようになる (目標)」ことを目指すのであり、そこに相違は認められない。つまり、目標を含む「行為 (action)」レベルにおいても、「ティーチング」と「コーチング」は同一の「働きかけ」として見なされるのである。このレベルにおける同一性は、例えば、「ティーチングとコーチングという言葉は、しばしば交換できるように用いられる。両方の言葉とも、体育において使用される教授の方法に言及したものである」(Neilson and Brons, 1965) という見解に示されるように、「コーチは教師である」という見解のひとつの根拠となる。

しかしながら、このレベルの「行為」とは、ある特定の瞬間を切り取ったものであり、この「働きかけ」はもう少し長い時間のスケールで考察する必要がある。何故ならば、特定の瞬間の現象レベルにおいての目標は、さらなる目標・目的へ到達するための手段として位置付けることができるからである。「ティーチング」と「コーチング」は「シュートが入るようになること」を手段として一体何を為そうとするのであろうか。これらの「働きかけ」のさらなる分析を進めるためには、それを「連続した一連の『働きかけ』」として捉え直す必要がある。

III 「コーチング実践」という概念

「連続した一連の『働きかけ』」を検討するために、まず「コーチング」という言葉の分析を試みた。その結果「コーチング」という言葉は、「A. ある競技スポーツの技能の獲得を目指して…の仕方を教える」「B. 獲得した競技スポーツの技能の卓越を目指して訓練する」「C. 競技スポーツの目標へ向かうように統率（リード）する」という3つの意味に分化していることが明らかとなった（久保, 1998, p. 72）。さらに、この「C. 目標へ向かうように統率（リード）する」という意味に注目し、「コーチング」をプロセスとして捉えた概念装置を作りだした。それが「コーチング実践」である。

「コーチング実践」とは、「哲学」―「計画」―「組織化」―「経営」―「評価」の各領域から成るプロセスの実践を意味している。これら各領域からなるプロセスを「回路」として捉え、それを「コーチング回路」と名付ける（図1）。「コーチング実践」とは、ある原動力によって「コーチング回路」を作動させることである。その「哲学」―「計画」の領域において、方針の決定がなされる。さらに、「組織化」―「経営」の領域において、方針が実施され目標の方向へと効率よく進む。最後の段階「評価」は「哲学」へとフィードバックする。この「哲学」の段階において、「計画」される目標そのものの意図（価値）、つまり何のためにその目標が立てられたのか、を論じることが可能である（久保, 1998, p. 122）。

「コーチング実践」の原動力は、様々な角度から分析されるが、ここでは、その到達する目標に注目する。競技スポーツは互いに勝利を追求すること、つまり「勝とうと試みること」によって成立するものであり、「コーチング実践」において統率（リード）するところの目標は「試合の勝利」である。よって、「勝利はよい（好い、良い、善い）」という価値（動機）が「コーチング実践」の原動力となる（注）。「コーチング実践」は絶えずこの競技スポーツの实在理由、すなわち勝利追

図1 コーチング回路

求の中で、そしてそれに対して循環する（つまり、勝利追求という機能を有する「コーチング回路」を作動させている）ものであり、またその「勝利追求」が暗黙の価値として行為を規制している（久保, 1998, pp. 141-152）。

次に、この「コーチング実践」「コーチング回路」という概念装置を用いて、「教師/コーチ」の活動の場である「運動部活動」、そこにおけるパラドキシカルな問題の分析を試みる。

III 「運動部活動の指導」のパラドックス

1. 回路の「ショート」

学校教育における「運動部活動」を論じる場合、まず批判されるのが「勝利至上主義」と呼ばれる問題である。しかしながら、「勝利」を追求すること自体を批判することは矛盾を含んでいる。何故ならば、勝とうと試みること（勝利追求）がなけ

れば競技スポーツは存在しないからである。では、「過熱」という言葉で批判されるように、「勝利の追求」の程度が問題なのだろうか。

運動部活動の「過熱」という問題は「コーチング回路」における「哲学」の段階と大きな関係がある。運動部活動とは、「競技スポーツ」を児童生徒の成長に有効な手段として、学校教育に取り入れたものであり、「教育プログラム」に「コーチング回路」を組み込んだものと考えてみる。その指導（「コーチング実践」）は本来、「子どもたちの成長はよい（善い）ものである」という「哲学」に基づいて、（その成長に良い）勝利の追求が「計画」されるものである。しかしながら、「哲学」の段階における意図を喪失することによって、手段が目的へと変貌し、勝利の追求それ自体が目的になってしまうという事態が生じる。つまり、「コーチング回路」における「評価」が「計画」へと「ショート」し、「閉じられた回路」と化してしまうのである（図2）。そこでは「計画」—「組織化」—「経営」—「評価」—「計画」というルーチンが繰り返されるのみであり、何

のために「計画」がなされたかは忘れられる。ここでは、「哲学」の段階で意図されたはずの「子どもたち」は忘れ去られ、「計画」された「勝利追求」こそが「よい（善い）もの」となる。そして、その勝利への効率と効果を高め、勝利追求の「コーチング回路」を合理的に管理し操作する方法のみが関心の中心となり、勝利追求をめぐる「回路」は暴走し続ける（久保, 1998, p. 283）。

以上の分析から、次のように主張することができる。運動部活動の「過熱」において批判されるべきものとは、その指導者の勝利追求の「度合い」の強さなのではなく、何のために勝利追求が「計画」されるのか、の判断の欠如（つまり、「哲学」の喪失）である。「ショート」すれば熱くもなる。

2. 「ノイズ」による回路の変質

運動部活動は、現状では教育課程の外に位置づけられているが、「学校教育の一環」とされている。しかしながら、この学校における運動部活動をベースとして「競技力向上」が企てられていることも事実である。このように運動部活動は、「教育的空間」に存在するのみならず、同時に「競技的空間」にも存在している。それ故に、「教育的空間」とは異なる空間、すなわち「競技的空間」におけるサブカルチャーの影響を受けることになる。その二重空間における「コーチング実践」は、「教育的空間」において支配的な価値「子どもたちの成長はよい（善い）」ではなく、「競技的空間」において支配的な価値「勝利はよい（善い）」によって作動される蓋然性がある。そこでは「教育プログラム」の中に組み込まれたはずの「コーチング回路」が、「競技的空間」からの勝利への強い「ノイズ」によって、あたかも「競技力向上プログラム」の中に組み込まれたかのように変質してしまうのである（久保, 1998, p. 283）。

以上の分析から、次のように主張できる。運動部活動は「教育的/競技的二重空間」において生起するものであり、「教育プログラム」の価値（子どもたちの成長はよい）を実現するはずの「コーチング実践」は、「競技力向上プログラム」の価値（選手たちの競技力向上はよい）の実現へ

図2 開かれた回路、閉じられた回路

と変化しやすい。そこでは、「子どもたち」は「選手（選ばれしもの）たち」と見なされ、その競技力によって計られることになる。よって「教育プログラム」と「競技力向上プログラム」は明確に分離される必要がある。

3. 教育プログラムにおける「バグ」

学校教育における「運動部活動」とは、教育的な価値（子どもたちの成長はよい）を実現するために「教育プログラム」に「コーチング回路」を組み込んだものであると設定した。「運動部活動」の指導とは、その「教育プログラム」に組み込まれた「コーチング回路」を作動すること（コーチング実践）である。「コーチング回路」は「勝利追求」の機能を有するものであり、またその指導とは運動部集団の目標（試合の勝利）に向けて統率（リード）することである。「勝利追求」それ自体は否定されるものではないし、「勝利至上主義」批判の論者たちが問題にするのも「勝利追求」それ自体ではなく、「至上」という言葉で表されるようにその「度合い」である。しかしながら、「コーチング回路」それ自体が「教育プログラム」と矛盾しないか（つまり、「教育プログラム」の中の「バグ」となっていないか）という問題は残るのである。「教育」のプログラミングにおいて「コーチング回路」を組み込むこと、すなわち勝利を追求する「競技スポーツ」を子どもたちの成長のための手段として採用すること、それ自体を再度検討する必要があるのではないか。つまり、「運動部活はよいものだが、行き過ぎている」という批判における最初の前提を検討する必要がある。「勝利追求」をその機能とする「回路」を「教育プログラム」の中に組み込んで、その「度合い（回路を流れるものの量）」を批判するのみでは何の解決にもならない（久保, 1998, p. 282）。

このような分析を加えることによって、ある仮説が浮かび上がってくる。すなわち、「コーチング」は「ティーチング」とは全く異なる「働きかけ」であり、そこには教育と相反するような傾向があるのではないかという仮説である。

V 仮説：「ティーチング」 ≠「コーチング」

まず、「ティーチング」にはない、「コーチング」の特殊性を指摘する。「コーチング」という言葉やその「働きかけ」は現在、スポーツにおける専売特許なのではなく、ビジネスなどの世界においても幅広く用いられている。その「コーチング」に関する考え方（本間, 2001）を参考にして「コーチング」を再考すると、そこには「人間が人間をある到達地点へと送り届ける（共に成就する）」という関係が認められる。これを仮に「X」とする。この「X」という関係は「教育」という関係（佐藤, 1993, p. 99）とは異なる点がある。例えばビジネスにおいて上司が、部下と共に売り上げ目標が達成できるように「働きかけ」る、これは「教育」と言うよりも「X」という関係であろう。スポーツにおいても、この「共に成就する」という関係「X」が認められる。例えば、「高橋尚子（選手）」の「成就（perform）」は、「コーチング」した「小出監督（コーチ）」の「成就（perform）」でもある。オリンピックの金メダルは「共に成就」したものである。しかし「教育」という関係において、「学生（生徒）」の「学習（learn）」は、「ティーチング」した「私（教師）」の「学習（learn）」なのではない。ここに、仮説：「ティーチング」≠「コーチング」を成立させるひとつの鍵があるように思われる。しかしながら、この仮説の詳細な検討は今後の課題であり、本稿においては以下にあげる記述を持って纏めとしたい。

「体育（教育）」という関係においては「ティーチング」のみではなく、「トレーニング」「コーチング」という「働きかけ」も同時に生起している。これらは共に「体育」における行為と考えられるが、それぞれが異なる。特に「共に成就」することを目指す「コーチング」は、本来、「成就する（あるいはそれを目指す）」ことで子どもたちの「人間化」を計るものではあるが、いつの間にか、子どもたちを手段として自分自身が「成就する」ことを計る、に変化する蓋然性がある。このように「コーチング」は、教育プログラムにおい

て「バグ」化する要素を有している。何故ならば、本来「X」という関係に属する行為を「教育」という関係へと転用したものと考えられるからである。

そして最後に、「人間形成」という神話に触れたいと思う。我が国における「コーチは教師である」論は、「体育における人間形成」論として出現することが多い。そしてそこでは、運動部活動の指導や、さらには自分自身の競技経験さえもが「体育」という名の下で「人間形成」と安易に結びつけられている傾向がある（久保，2001）。アメリカにおいても、「“sport-builds-character”」は「神話」とありとし、「いかにスポーツが人間をつくらないか」を数多くのデータを基にして検証している研究者がいる（Miracle and Rees, 1994）。このように「スポーツ」やその「コーチング」は、「人間形成」という神話によって、教育の中に止まっているのかもしれない。果たして、それは「神話」なのか、「事実」なのか。教師か、コーチか、この問題は多くの課題を含んでいる。

注

この原動力、勝利は「よい（好い、良い、善い）」という価値（動機）はHodgkinson（1983）の価値パラダイムに対応している。また、その価値の相違（勝利は「好い」—「良い」—「善い」）に基づいてコーチを類型化することが可能であり、それらを「コーチの元型」として纏めている（久

保，1998，pp. 191-236）。

文 献

- Chelladurai, P. and Kuga, D.J. (1996) Teaching and Coaching: Group and task differences. *Quest* 48: 472-479.
- Hodgkinson, C. (1983) *The philosophy of Leadership*. Basil Blackwell: Oxford, pp. 36-41.
- 本間正人（2001）ビジネス・コーチング。PHP研究所：東京，pp. 12-37.
- 久保正秋（1998）コーチング論序説。不昧堂出版：東京。
- 久保正秋（2001）「体育における人間形成」論の批判的検討3. 体育原理研究 31：1-8.
- Miracle, A.W. jr., and Rees, C.R. (1994) *Lessons of the Locker Loom: The Myth of School Sports*. Prometheus Books: New York.
- Neilson, N.P. and Bronson, A.O. (1965) *Problems in Physical Education*. PrenticeHall: Englewood Cliffs, p. 129.
- 佐藤臣彦（1993）身体教育を哲学する。北樹出版：東京，p. 99.
- Templin, T.J. et al. (1982) On Becoming a Physical Educator: Occupational Choice and the Anticipatory Socializing Process. *Quest* 34: p. 129.
- Thomas, C.E. and Ermler, K.L. (1988) Institutional Obligations in the Athletic Retirement Process. *Quest* 40: p. 139.

（平成14年2月26日受付）
（平成14年4月27日受理）